新潟卸センター企業インタビュー

株式会社水澤商店

代表取締役社長
水澤（みずさわ）徹（とおる）

R4
発行者
新潟大学

執筆者/新潟大
樊　伊
坂大　佳穂
坂田　功星

中小企業の多様化

新型コロナウイルスの影響により中小企業の経営状態、業績が悪化しているという状況であるが、中小企業が様々な外部環境の変化に対応、存続していくためにはどのようなことが必要かを考えた。調査の結果、「①取引先企業のリモート化、IT化に対応すること②働き方の多様化に伴って雇用形態の多様化も進めること③働き方の多様化をマネジメントに活かし企業の経営状態を安定させること」が必要であると考察し、ダイバーシティマネジメントを用いて、企業の仕組みを柔軟に外部環境に適応させるのが良いのではないかと考えた。文具や事務用品を扱っている水澤商店では、新型コロナウイルスの影響による働き方などの大きな変化は無く、仕組みを変える必要は無かったようだった。現時点では、ダイバーシティマネジメントの必要性を感じていないということだったが、今後必要なときが訪れれば積極的に取り入れ、企業も変化していく必要がある、と前向きに捉えていた。今後は中小企業も積極的にダイバーシティマネジメントを取り入れることになるのではないだろうか。

会社概要

協同組合新潟卸センターの団地内に本社を構える株式会社水澤焦点は、主に文具・事務用品・OA機器・OAサプライの提案、販売を行っている。官公庁や民間企業、小売店を対象にした一般部門、全国の小中学校を対象とした学納部門、量販店を対象とした量販部門と幅広い営業を行うなかで卸売企業としての役割を担っている。主力販売商品の一つであるファイルは、自社製品でもあり、授業や用途に合わせた多種多様な商品を扱っている。水澤商店は、METSといわれるシステムの活用により、顧客へのサービスを実現し、地域社会・産業・文化・教育に貢献している。

→新潟卸センターに本社を構える株式会社水澤商店（協同組合新潟卸センター「組合員紹介」より）

竹尺からプラ尺へ

―変化する文具―

小学生が学校で使用する三十センチものさしといえば、「竹尺」が頭に思い浮かぶ人が多いだろう。しかし、現在はアクリル製のいわゆる「プラ尺」が主流となっている。水澤商店では、竹尺とプラ尺の両方を扱っている。実際に商品を見せてもらったが、実物の色は竹尺に近いものの、当たり前だが、感触は竹尺のそれとは異なっていた。詳しい話を聞くと、竹尺は気温や湿度の変化によって反ってしまうとのこと。使用するときは浮き上がっている部分を押さえる必要があり、小学生には少し扱いづらい。それに対し、プラ尺はそれらの影響を受けず、長期的に使いやすいのが特徴である。また、一般的な竹尺には数字がないが、水澤商店が扱っているプラ尺には五センチごとに目盛りが書いてるため、より測りやすくなっている。実は我々に馴染みのある「竹尺」も既に一つのジェネレーションギャップかもしれない。

編集後記

「多様化」という言葉が社会に広がる現代において、中小企業にとっては、働き方や雇用の多様化への対応は容易ではありません。しかし、時代は常に変化しています。企業存続のためには時に、「伝統」よりも重視しなければならないものがあるかもしれません。企業見学では、小中学校を対象に販売しているファイルや定規などのカタログや実物を用いて解説してくださいました。時代とニーズの変化に合わせて多種多様な商品を扱っており、懐かしさとともに驚きを感じました。インタビューにご協力していただきありがとうございました。

（坂田功星）

会社詳細

▼商号：株式会社水澤商店
▼所在地：新潟市東区紫竹卸新町一八〇八－30
▼代表者名：水澤徹
▼創業：一九四九年
▼主要業務：文具、事務用品、OA機器、OAサプライズ、オフィス家具、ファンシー雑貨、学校用品を中心に新潟県内の書店、文具店、OA機器取扱店、ファンシー雑貨店、カメラ店、広域量販店への販売及びサービスを主とする。